

幼児の舞踊とその指導以前の問題

邦 正 美



先ず第一に幼児の舞踊ということばについて誤解を招かないようにしたいと思う。私は幼児の舞踊は幼児の舞踊とよんだ方が一番よいと思う。これを「あそび」とか「ダンス」とか「リズム」などというのはまちがいである。それは一種のごまかしであり「逃げ口上」的であるからである。ほんとうはこのことについてもこれをくわしく解明しなければならないし、またそうすることも指導以前の問題の一つであるが、ここでは紙面の都合上省略して他の機会に譲ることにする。



何故舞踊が教育のとしてとりあげられてるかを考えてみると

いろいろなおもしろいことがわかる。幼稚園では多くの時間を舞踊のためにさいているのであるが、勿論これはただ幼児は舞踊することが好きだから、という理由からではあるまい。子どもがおどりを楽しみ、上手に踊れるようになり、上手に踊ることには教育の目的があるのではない。子どもがよろこぶからというのも見当はずれである。

教育における舞踊の役目は、幼稚園でも高校でも、心と身体の問題をとりあつかうことにある。ここで心というのは感情と智識の両方を含めたものである。心と身体との関係にもとを置いてなされる教育は舞踊以外にはない。人間は四肢が立派に備わっていてもどんなに健康であっても、もし心が動かさうとしなければ体は動かないものである。ラバンは、身体を精巧な起重機にたとえ、心をその運転手にたとえているが、舞踊とは身体のことだけのことでなく感情とか情操のことだけを目標にしているのではない。この両方をその関連においてとりあつかうことである。そうすると、教育としての舞踊の最も基本的な目標はおどりが踊れるようになるとか、感情の表現がどうだとかという枝葉のことにあるのではなく、心と身体を最も自然な関係において作用し発達発育せしめることにあるといわなければ

ならない。幼稚園においては殊にそうである。何故ならば幼稚園においてこそ最も基本的なことからはじめられねばならないからである。感情がどうだ、情操がどうだ、リズム感がどうだ、表現がどうだということも勿論大切なことではあるが、しかしこれらはその次にくる課題であって、先ず第一にはこの心と身体の関係ということが教育の対象になるのである。



人間の生活は運動からなりたっている。人間は運動しているからこそ生きている、と申してもよいかもしれない。私たちの一日は運動でぎっしりつまっている。私たちはとにかく動いているのである。私たちの身体の運動の中で或る特殊な目的のためになされるものがある。それは労働の運動である。仕事の運動である。私たちの運動の中からこの仕事の運動を取り除いたもの、即ちあとに残ったものの方がずっと多いのであるが、これらの運動を私は広義の舞踊と名づけるのである。仕事以外の運動は遊びの運動であり、それが即ち広義の舞踊であるわけである。こういうふうに考えると、人間の生活のより大きい部分

は、人間のなす運動のより大きい部分は舞踊であり、舞踊の運動であるということがわかるのである。

殊に幼児は労働という意味の仕事は殆んどしない。彼らの生活は遊びだけであるといつてもよい。だから幼児のなす運動は殆んどすべてが舞踊の運動であり、それは舞踊である。幼児の動的な生活は舞踊の生活である。幼児の教育に舞踊が大切であるのはこれがためである。高等学校よりも中学校よりも小学校よりも、幼稚園の教育において舞踊が重要な位置を占めるのはこれがためである。

但し幼児のこういう意味での教育のための舞踊は、おとなが考ふる芸術的なおどりでもなければ、ぼんち画のような児童舞踊と称するものでもなければ、リズム遊びだの表現だのといふたぐいのものでもない。もっと根本的なものである。



ちょっとばかり英文が読め、仏文や独文を解せるからといって、外国の幼児教育ではこんな事をやっているとか、リズムがどうの、物語りがどうのと、偶然に手に入った本や写真の教育

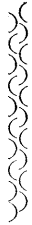
舞踊における価値判断をする知識のないままにアナクロニズムをさらけ出すパロディならぬパロディが、幼児の教育舞踊の世界にはよくあることであるが、しかしこの分野の研究はどこに国においてもあまり進んでおらず、またその中でも進んだ研究は第二次大戦以後に初めて始まったことに注意しなければならぬ。



私はたびたび次のような事を経験した。講習会のようなところで集った幼稚園の先生たちに題材やヒントや伴奏音楽までそろえて極めて簡単な舞踊をおどってもらった。何でもよいからとよく説明をする。しかし大部分の先生は踊らない。どうして踊ってよいかわからないという。手をどうあげてよいのか、脚をどう動かすのか、否、手や足が動かない、というのである。ところがそれらの先生は自分で歩いたり走ったりしてその会場に入ってくるのを私はたしかに見とけたのである。たしかに手や足の動かし方を知っているのである。それなのに何故動かせないというのであろうか。これに対する答えは明白である。手

や足は、即ち身体そのものは動ける状態にあるのに（健康な人間なら誰でもそうであるが）動けないのは身体の問題ではなく心の問題であるということが分るのである。身体が動かないのではなくて身体を動かす心が動かないのである。心が動かないのは何かを心をしぼって動けないようにしているからである。

心をしぼるものは何かというと、それは「おどり」という型である。お月さんといえば両手を頭の上にもって円くするものだというおどりの型、チューリップといった指を開いて花の形にするという型、何々ステップだ何々表現だという型。おどりというものはこれらの型型を組み合わせたものだと信じているのである。これが心に型をわくをはめてしまったのである。心はこのわくにしばられて自由には動けないのである。だから今までとんだりはねたりして（それこそがほんとうの舞踊であるが）いた人々が、いざおどりとなると急にとぶこともはねることも出来なくなってしまうのである。



児童舞踊とよばれるところのおとなのつくったおどり、これ

も型である。参考作品とカリズム遊びとかというものも、表現何々とか何々教材というものも、その多くはおとなのつくった踊りの型である。もっとも最近のこういうものは如何にも教育的な名称や目標をにかけてはいるが、しかしその実体はおどりの型であることにまちはがいはない。実のところこれらはすべていわゆる児童舞踊と同類のものである。美術では児童画といえど児童のかけた絵画であって、決しておとなが子どものまねをして子どもらしくかけた画のことではない。しかるに児童舞踊というものは児童がつくった舞踊にあらず、おとなのつくったおどりであるから、そこに問題があるのである。

表現だ、リズムだ、情操だと申してみても、児童にとっては次々とおとなの型を教え込ませられるだけである。成長しておとなになっても一生それから抜け出すことが出来ないように幼稚園からしつかりと型をたたきこまれるのである。もうそうなるよこのようなのはほんとうの舞踊とは縁の遠いものである。そしてほんとうの教育とも縁の遠いものでありはしないか。



このようなおどりは、たとえ上手に指導したって下手に指導したって、それが教育にプラスにならずマイナスになる点においては五十歩百歩である。即ちこのようなものの指導法の研究ということは勿論そこに程度の差はあるであろうが、つまるところは「どうしたら上手に型を教え込むか」という研究に終始するのである。したがって私たちはこのような指導法を研究する前に、それ以前に解決しておかなければならない根本的な問題があることに気づくであろう。上手に、巧みに、子どもに児童舞踊やリズム遊びと称するものやダンスとか遊戯とか表現何々とかを教え込むのが、幼児の舞踊指導だと思ったら、それは根本的にまちがっているのである。

幼児の舞踊指導はやさしいものではない。しかし勉強し努力すれば出来る。勉強しないで安易にかたづけようとすると出来ぬ。講習会などで、いくつかの幼稚園用のおどりを習ってきてそれを子どもに教え込む。これではその先生はかつぎ屋さ

んに過ぎない。幼稚園の先生だからといってその舞踊の知識と技術が幼稚園児と同じ程度のものであってよいということはない。その子どもの百倍も千百倍もの知識と技術が必要であろう。そうでなければ教育は出来ないであろう。しかるに講習会で参考作品というおどりを覚えて帰る先生たちの多くは、その舞踊能力においては自分の子どもと余り差がない。

そこで指導法に夢中になる前にもっともつと教育舞踊の勉強をすべきだと思う。もつと基礎的な勉強をし知識を持てば、音楽のリズムと舞踊のリズムを混同するようなことはしないであらう。勉強をしてないからこそ「二拍子のリズム」などというこの世に存在し得ないゆうれいのようなリズムパターンを公表して不必要な恥をかくのである。私は今の日本で幼稚園の先生の最も大切であり急を要することは基礎的な勉強だと思っている。

(舞踊家)